

先生たちの働き方改革を知る講座をレポート。

保護者からの「小さな応援」が先生を勇気づけ、教育の質向上につながっていく

「先生は多忙」ってどう忙しいの？ 先生の働き方を知ることから始めよう

「働き方改革」という言葉を聞いて久しいけれど、「学校の先生はとにかく忙しい」という印象が強いまです。保護者からすると先生の様子を見られるのは、学校公開の授業のときや個人面談で話すときくらい。授業や保護者とのかわり以外の「先生の仕事」にどんなものがある、どれくらい時間をかけているのか知る機会もありません。

そして、何か相談したくても「なんだかわからないけど忙しそうなお先生」にはなかなか話しかけにくい。すると、コミュニケーションが少なくなり、先生と保護者の間により距離ができてしまう…。多くの学校で、そんな状況が見られるのではないのでしょうか。

2021年3月21日、川崎市幸区PTA協議会が家庭教育学級としてオンライン講座「みんな知りたい！ 働き方改革ってなに？ 先生とどう付き合えばいいの？」を開催しました。先生の「働き方」を知ること、先生たちとどう向き合うかを考えていく場として、保護者はもちろん、他地域の教員も含め40名を超える参加がありました。

先生の働き方に詳しい「先生の幸せ研究所」代表の澤田真由美さんと、川崎市教育委員会小島課長からのお話があった後、参加者の方とのチャットを含めた意見の交換をする形でイベントは進められました。

講座の目的は、先生たちの実情を知ること、学校や先生方に対してどのようなかわりかたが望ましいのか、どのようにともに地域の教育にかかわることが望ましいのかを考えることです。あるようでなかった貴重な機会に多くの方が関心を寄せてくれました。

忙しくなるほど、先生の本来の仕事である「教える」の質が担保されない

最初に登壇してくれたのは、澤田真由美さん。元々小学校教員として10年間働いていた経験から、技術も心も豊かな幸せな教育者を増やしたいと、2015年に「先生の幸せ研究所」を設立。学校専門ワーク・ライフ・バランスコンサルタントとして活動しています。

澤田さんは学校の働き方改革は学校教育の質を上げるために行うことであり、「学校教育の質の向上」のために必要なことは3つあるといいます。それは、「先生の心と時間のゆとり」、「新しい教育創造へのチャレンジ」、そして「先生たちの健康」です。

ただ、残業を減らせばいいわけではない。学校教育の質を高めるために、先生たちの心と時間のゆとりが必要で、それが新しい教育の創造へつながる。結果、先生たちの健康が担保されるということです。

先生へのアンケートでは、「勤務校において多忙と学級崩壊は関係している」に、はいと答えた先生が94%という結果が。そのほか9割以上「はい」と答えた設問は、「多忙により褒める回数が減る」、「多忙により叱る回数が増える」「多忙により丁寧にステップを踏むべきときに丁寧な指導ができない」などがありました。

先生たちのゆとりのなさが、子どもたちの教育の質に大きくかかわっているということがわかります。

では、先生たちはなぜそんなに多忙なのか？ それには先生たちの持ちコマ数(授業数)が関係しているとのこと。持ちコマ数が平成19年から年々増えている現状があり、いわゆる「空き時間」がかなり減ってきている現状があります。

「空き時間」で授業準備やマルつけをしたり、さまざま対応をしているのに、その時間がどんどんなくなっていっているのです。そして、その分を残業でまかなうという構造に。しかも、先生たちの残業代は基本的に出ません。

「空き時間」という言い方がおかしいという話も、後の意見を出しあう場に出てきました。確かに「空いている時間」ではなく、授業以外の業務をするべき時間であるはずです。

先生がやること、家庭で担うこと。それぞれの役割をもって、学校をよりいい場に

そんな先生の負担を減らすべく、文科省からの「通知」が出ています。「学校における働き方改革に関する緊急対策」として出されているのは、先生の業務の仕分け。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingji/chukyo/chukyo3/079/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/02/09/1401326_3_1.pdf

基本的には学校以外が担うべき業務	学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務	教師の業務だが、負担軽減が可能な業務
①登下校に関する対応 ②放課後から夜間などにおける見回り、児童生徒が補導された時の対応 ③学校徴収金の徴収・管理 ④地域ボランティアとの連絡調整 ※ その業務の内容に応じて、地方公共団体や教育委員会、保護者、地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等が担うべき。	⑤調査・統計等への回答等（事務職員等） ⑥児童生徒の休み時間における対応（輪番、地域ボランティア等） ⑦校内清掃（輪番、地域ボランティア等） ⑧部活動（部活動指導員等） 部活動の設置・運営は法令上の義務ではないが、ほとんどの中学・高校で設置。多くの教師が顧問を担わざるを得ない実態。	⑨給食時の対応（学級担任と栄養教諭等との連携等） ⑩授業準備（補助的業務へのサポートスタッフの参画等） ⑪学習評価や成績処理（補助的業務へのサポートスタッフの参画等） ⑫学校行事の準備・運営（事務職員等との連携、一部外部委託等） ⑬進路指導（事務職員や外部人材との連携・協力等） ⑭支援が必要な児童生徒・家庭への対応（専門スタッフとの連携・協力等）

ここでは、学校以外の業務、学校の業務だが教師が担わなくてもいいもの、教師の業務だが減らせるものを提示しています。

そして、澤田さんは、学校と家庭の役割を考えてみようかと提案してくれました。いろんな捉え方があるとは思いますが、澤田さんが考えているのは、

学校は「基本的教養と社会性」
 家庭は「基本的生活習慣」

を身につけさせる場ということ。

例えば、子どもに歯磨きの習慣がなかなかつかなくて困っているなら、それは「学校でなんとかしてもらおうこと」ではありません。とはいえ、家庭での困りごとを「一緒に子どもにかかわる人」として先生に相談することはできるのではないのでしょうか。

「小さな芽」のときにアクションしておく。先生へ相談するタイミングは？

では、どうやって先生にかかわればいいのでしょうか。持ちコマ数が増えて忙しく、家庭と学校の役割をそれぞれ担うべきだということを考えると、先生へちょっとした相談をするのをますます躊躇してしまいそうです。実際、イベント後半の意見交換会では、そういう発言（チャット）もありました。

しかし、澤田さんは本当に簡単なことからでいいと言います。「先生に会ったときに『こんにちは』とか『お久しぶりです』とか、ひと言声をかけられるだけでも、内心すごくうれしいです。保護者が声をかけてくれるということは、少なくとも敵ではないんだなって思えて、実はとてもパワーになっているんですね」。また、連絡帳にひと言書くのもいいとのこと。

そして、「小さな芽のうちにアクションをする」ことが大切だそう。小さい不安や疑問のうちに「これ、どういうことですか？」と聞いておくと、対応できること、選択肢が多くあります。でも、大きな

不満不信になってから学校に相談をしても、事が大きくなりすぎて、どこからほぐしていったらいいかわからない状況になってしまう。そうなる前に安心して相談してほしい、と澤田さん。

意見交換の時には、「先生と保護者が接する機会が保育園の時と比べて圧倒的に少ない。もう少し先生と保護者がコミュニケーションとれるといい」という話も。

先生への挨拶や連絡帳のひとつだけでも「敵ではない」アピールができるなら、基本的なことだけでももっと大切に考えてもいいかもしれません。

ゼロリスク思考になりがち？「いい先生像」から解放するために応援を

先生との距離感をつかめないなと思ってしまう保護者がいる一方で、澤田さんによると先生たち自身も世間や保護者の声を気にしすぎてしまうことがあるようです。過去に保護者たちからお叱りを受けて萎縮してしまい、今はそんな関係性ではないのに、ゴーストのようなものに囚われているという場合も。

「『隣のクラスはあれをやってるのに、うちクラスはしないんですか？』と言われるとまるで怒られたように考えてしまい、学校内で揃えるルールが出来上がってしまったり。それらは、失敗してはいけないというゼロリスク思考を助長されます」

新しいことにチャレンジするには失敗はつきもの。しかし、それを恐てしまうと「失敗するぐらいだったら、今まで通りやろう」と前例を選んでしまいます。そして、先生たち自身の中に「いい先生像」がある人が多く、失敗への恐れから自分たちでブレーキをかけてしまうこともあるそうです。

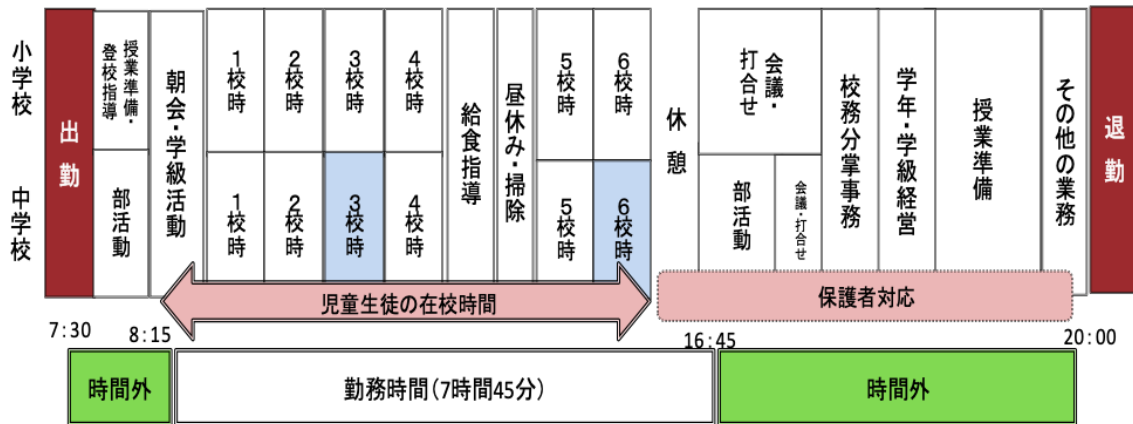
先生も人間。小さな失敗も含めて先生のやり方を応援していただけたらいいのかもしれませんが。澤田さんは、「応援を受けていると思えると、チャレンジすることを選べる場合もあります。先生への応援の姿勢を見せていくことが、実は回り回ってわが子の教育にすごくかかわってきます」と伝えてくれました。

「教える」に熱情をもっている先生たち。教育委員会の取り組みは？

もうお一人の登壇者、川崎市教育委員会教育政策室の小島さんは、先生たちがどのように勤務しているか、勤務実態についての調査報告と川崎市の取り組み「教職員の働き方・仕事の進め方改革の方針」について話をしてくれました。なかなか教育委員会の方が保護者と対峙する機会はないとのこと。

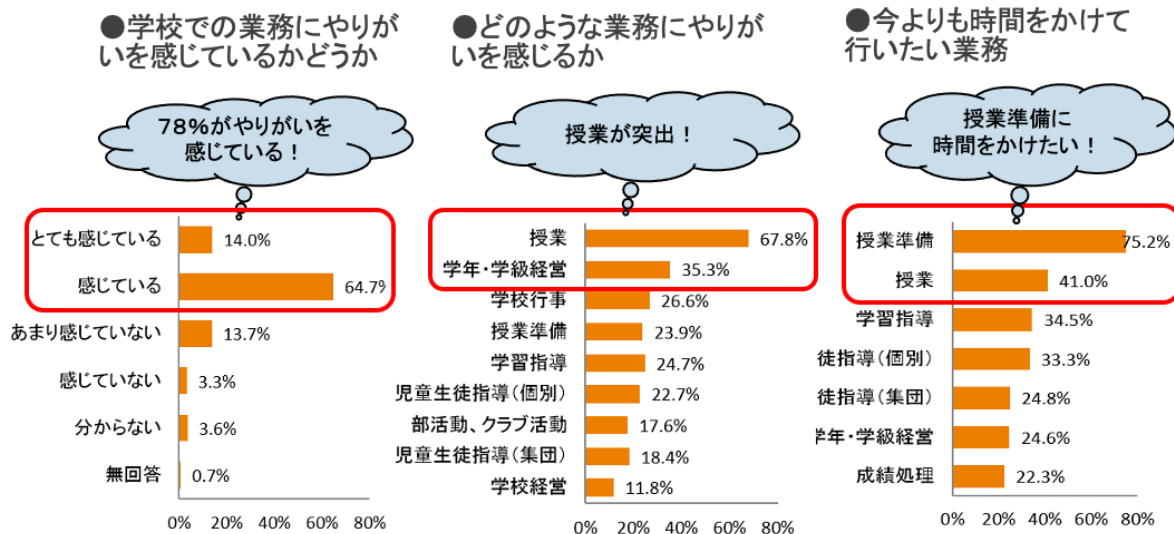
先生たちの勤務イメージです。

教員の1日の勤務イメージ



児童・生徒が下校した後についても、学校運営のために必要な事務や授業準備をしています。学校行事の前には、それに関する会議などのさまざまな仕事をこなしているということがわかります。平日は毎日3~4時間、時間外勤務をしている状況です。

そのような多忙な日々を送っている中で、先生たちどんな想いをもって働いているかも紹介してくれました。



平成29年度に実施した勤務実態調査では、「学校の業務にやりがいを感じてい」先生は、全体の78%となっています。「どのような業務にやりがいを感じているか」という問いに対しては、68%が「主に授業にやりがいを感じる」と答えています。授業にもっと時間をかけたいと感じている先生は75%。

「非常に多忙な毎日の中でも児童生徒に関わる学校の仕事にやりがいを感じて、教員本来の教えるという使命に、非常に情熱を持って取り組んでいるということがわかります」と小島さん。

そんな先生たちの状況を受けて、川崎市の教育委員会での取り組みは、「教職員の働き方・仕事の進め方改革の方針」としてまとめられています。

方針の基本的な考え方は、第一に「先生の健康を維持し、やりがいや誇りを持ちながら業務を遂行できる」こと。そして、そのためには、何が先生の本来の役割なのかを明確にすること。文科省の通知同様、学校以外が担うべき業務、学校の業務だけれども、必ずしも先生がやらなくてもいい業務を整理しているそうです。

働き方改革の方針では、3つの視点に基づいた具体的な取り組みを実施。

- ・学校における業務改善支援体制の整備
- ・チーム体制の構築を、構築と学校を支える人員体制の確保
- ・働き方仕事の進め方に関する意識改革の推進

「こうした働き方改革を進めることで、何より先生自身が健康で、元気がいっぱいになって仕事ができる。そして、先生が一番生き生きできる時間、児童・生徒にかかわる時間が生まれます。多くの先生が望んでいる授業準備や共済研究の時間がもっと充実して確保できることにつながります」

「先生が笑顔で元気でいっぱい、児童・生徒も元気になり、笑顔になる。子供たちが笑顔なら、保護者も安心して、学校との信頼関係がよくなっていく」と、これらの改革の先にあるビジョンを伝えてくれました。

「これはできる」、「これは難しい」とちゃんと言い合える設定を

澤田さんや小島さんの話を聞いた後、イベント参加者のみなさんで感想をシェアしたり、意見を出しあったりしました。

先生の働き方の実態を目の当たりにして、

「自由にコントロールできる時間が1時間というのは短くて驚きました」

「そういえば、担任の先生に感謝を伝える機会ってあまりないなあ」

「子どもが悩みを抱えたとき、保護者が出るタイミングで悩むことが多いです。やっぱり、担任と子どもとの信頼関係があれば、問題は大きくならないのだなと思いました。担任の先生が、学級経営にかける時間をしっかり確保することが大切なんだなと実感しました」

といった感想がありました。一方で参加者の中にいらっしゃった教員の方からは、

「保護者の方と直接会ってお話できる機会がたくさんほしいです。連絡帳や電話だけでのやりとりだと齟齬があったり、頻度会える頻度が少ないと本音で話すことができない方もいると思うので。気軽に学校に来てほしい。(個人的には)」

という意見も。

そして、学校とのかかわり方として、対話の大事さも浮き彫りに。

「小さな芽のうちにアクションというのが、刺さりました。どうしても遠慮してしまうところがあります」

「先生と面談時にいろいろ話そうとしてもちょっと距離があるように感じました。先生に遠慮があるような。保護者がつくりだしてしまっている距離かもしれませんね」

「自分で勝手に作ったハードルを下げていかないとたと痛感しています」

また、こんな体験をシェアしてくれた方も

「学校ボランティアを作りました。その際に校長先生や、教頭先生と面会をしたのですが、『できないことはNOという』、『入ってきてほしくないことにはNOという』ということをお互いに最初のお約束としてお話ししました」

最初に「これはできる」、「これはダメ」とちゃんと言い合える設定をしておくことで、気兼ねなく伝え合えます。保護者も先生も「これは負担になるのではないか？」と遠慮している場合も。

「信頼関係が大切」とは、どんな場面でも言われることですが、信頼関係をどう築くのかを考えることが第一歩。対話を進ませるための設定をきちんとしておくことの有効性を感じます。

先生とコミュニケーションを取るとき、どんなツールがいい？

先生たちに何かを伝えたい、一緒に考えてほしい、そう思ったときの手段についても話題に上りました。連絡帳、電話、対面。コロナ禍でどんなツールを使ったらいいのかも気になります。

澤田さんからのアドバイスは、「ツールは先生一人ひとりニーズが違います。個性が出る場所なので、先生に直接聞くといいと思います。保護者の方からもこんなやり方はどうですか？と試してみてもいいのではないのでしょうか」とのこと。

参加者の中には「PTA 役員として学校の教職員の皆さまとかがかわらせていただいています、その際には一般的なお話をさせていただき、わが子のことで相談があるときは連絡帳を使うようにしています」と使い分けしている方も。

また、澤田さんは、学校側に伝えるときの留意点も教えてくださいました。「学校に何か伝えるときに、明確に要望する側される側となってしまうと、学校側は構えてしまったり、お互いの知恵が出にくくなる場合もあります。こういう困りごとがある、こうなったらいいと考えているので一緒に考えましょう、というように伝えたらどうでしょう」

どんなツールでコミュニケーションを取るかを確認するところから、対話の機会があるということでしょうか。

講座に参加した私たちのこれからのアクションは？

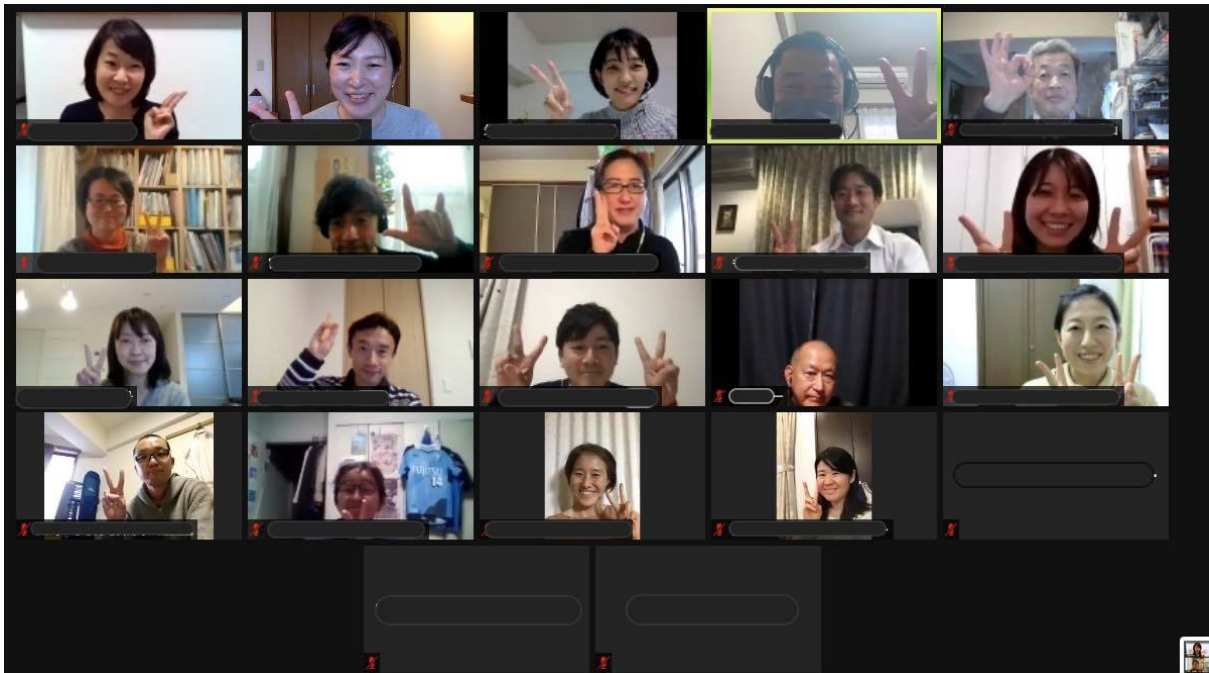
最後に、「自分たちでできること・応援団になれることをどんなに小さくても良いので考えて書いてみてください」というテーマで、参加者のみなさんがチャットに書いてくれたことを抜粋します。

「事務的なことだけでなく、先生への感謝の気持ちだったりなども連絡帳を通して伝えていいということを、まわりの保護者の方へもお伝えしたいと思いました」

「個人個人のつながりや信頼関係からですね。感謝の言葉をちゃんと伝えていこうと思います」

「学校と保護者と地域みんなが、人として繋がれる方法を見つけていくこと。お互いがお互いを信じあえる関係をつくるのが子どもと一緒に育てるということかなと思いました」

「先生一人ひとりと学校としての組織にも保護者・PTAとの関わり方について考えの違いがあると思います。人として付き合える関係づくり、子ども達に還元される活動ということを軸に考えていきたいです」



先生と保護者が、「敵」ではなく、「共に子どもの育ちを見守り、かかわる同志」としてコミュニケーションを取れたら。それは、先生も保護者も望んでいることです。

ボタンの掛け違いがないように、保護者からは先生のことを知り、「応援しています」「一緒に考えたいと思っています」と伝え続けることが大切。それは、連絡帳に事務連絡以外のちょっとした感謝を書くという小さいことから始められることがわかりました。

また、このようなイベント・講座がさまざまな地域や場所で行われることも先生たちへの応援につながっていくのではないのでしょうか。場づくりの知恵や工夫もいろんな地域で共有されることもその一環かもしれません。

(フリーエディター/編集者 [東麻吏](#)(ひがしまり))